



「くまもと阿蘇復興かき祭り」で牡蠣を販売する越智会長（右）と宮本博史第20代全青連会長（中央）。青年部でのつながりがあったことで、阿蘇門前町商店街との共催で開催することができた

を考え、まったく別の地域の女性部の方々を招いておもてなしをするというものです。昨年度は、おもてなしプラン数226件のうち、149件が利用され、合計で約4000人が利用しました。これらは、地域と地域がつながるだけではありません。知らない地域の人たちを招いたり、また、お返しにその地域を訪ねたりすることでもあります。知らない地域の部員同士の交流が図られて、ネットワークの絆を強めています。

#### 部員同士のつながりが財産

**越智** 女性部も青年部も、人と出会えるというのが素晴らしいところですね。

**末武** そうです。私自身も全国各地を訪ねて、さまざまな方にお会いしてきましたが、人が何よりの財産になっています。

私の事業でも最近、女性部のネットワークや人との出会いの大切さを実感しています。私は建設業とともに農業もしていて、お米をつくっているのですが、今年から息子が玄米食の商品をつくり販売を始めました。それを私が全国に出かけるたびに皆さんに配っています。すると、「注文をいたしました」というふうになりました。全女性連の会長として12年目になりますが、本業でこんなことは初めて（笑）。これも、多くの方々と出会えたからですね。

**越智** 私の場合、例えば、第20代全青連会長を務められた熊本県阿蘇市の宮本博史さんですね。2年前の熊本地震の後、私の会社が阿蘇で下水道の復旧工事をさせていただきましたが、宮本さんはその際に従業員の宿泊先の確保や飲

食店などを紹介していただきました。その恩返しをしようと、弊社の有志とともに、地元の広島県・江田島産の牡蠣を阿蘇地域の人々や観光客に振る舞うイベントを開催させていただきました。

こうしたことがきっかけで、事業でも地域貢献でも、どんどん想像もつかないようなイノベーションが起きいく可能性があると感じています。今度は江田島で、阿蘇の赤牛のイベントだってできるかもしれません。

**末武** 災害に見舞われた被災地への支援では、商工会女性部や青年部はとくに仲間への思いやりの気持ちが強いですよね。こんな組織

全国商工会青年部連合会  
会長 越智俊之



越智俊之会長 × 末武榮子会長 特別対談

# 全国に広がる仲間と ネットワーク力を活かす

部員の事業拡大や地域活性化のために、組織のもつネットワーク力がいかに有効なのか、全国商工会青年部連合会の越智会長と全国商工会女性部連合会の末武会長が語り合った。

#### 事業や地域の垣根を越える

**越智** 私は、小規模事業者が持続的な発展をしていくためのキーワードは「共創」だと思います。

これは、まさに青年部にいえることで、実際に全国の青年部仲間が地域の垣根を飛び越えて事業でつながるケースが生まれています。

そのためにはお互いの信頼関係が不可欠ですが、その意味でも青年部のネットワークは素晴らしい。

**末武** 女性部の活動が、組織のネットワークを通じ、全国に広がった例があります。愛知県の祖父江町でエレベーター内の壁紙を張り替える事業をしている商工会女性部員がいらっしゃいます。施工作業で出る半端な資材を再利用できないかと悩んでいました。そこで女性部で話し合い、この余った資材を使ってエチケット袋入れをつくり、福祉施設や介護施設に配布することにしたのです。この活動を知った全国各地の女性部から、「自分たちも行いたい」という声が上がり、資材の注文が入るようになりました。

**越智** それはすごいですね。全青が上がりました。

全国商工会女性部連合会  
会長 末武榮子

連では今、全国の青年部員の実態調査を行い、基礎データを集めるとともに、業種別などで部員の事業所を検索できるホームページを作成しているところです。こうしてネットワークにより、部員同士がつながり、事業で困ったときなどに協力関係を築けると考えています。たとえば私は建設業ですが、ある材料を確保したいとき、全国の部員の事業所から材料を探すことができるわけです。

**末武** 全女性連の事業でいえば、「おもてなし交流事業」もあります。これは単会の皆さんのがプラン



処理費用を支払って処分していた半端な資材でつくれられたエチケット袋入れ。福祉施設などの方々と交流しながら作成する講習会が各地で開催されるようになった

